

原の古城

| | |
|-----|---|
| 著者 | 圖南生 |
| 雑誌名 | 龍南會雜誌 |
| 巻 | 1 6 0 |
| ページ | 5 2 - 6 6 |
| 発行年 | 1916-03-28 |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/6558 |

原の古城

一部二年甲一 圖 南 生

(一切支丹禁制——サン、フィリッヅ號——衰蟲の刑。)

琵琶湖畔、安土の城下に聳て立つ尖塔の頂に光る十字架の色、朝な夕なに鳴り渡る南蠻寺の横銘の鐘の響。サビエル上人の布教後四十年に満たざるに、はや諸國の大名士民、神も佛もうちすて、悉く天主「Deus」に歸依せしかと疑はれぬ。

されど天正十年六月二日、高松城の天嶮に苦しめる秀吉を救はんがために、右大臣の衣冠をかなぐりすて西征すべく手兵と共に本能寺に宿りたる信長が、思ひがけなき惟任日向の謀逆に恨を吞んで白刃黒烟の中に倒れしより、切支丹宗壓迫の歴史は始まるなり。

秀吉の世となりて後五年、長崎に於ける宣教師バテレンの無禮の振舞は秀吉の怒る所となり、南蠻寺は毀たれ、大阪堺、山口、長崎等の教會堂も廢せられ、宣教師バテレン、宣教師補等イルトスは各本國へ追放せられたり。

慶長元年の頃とや。サン、フィリッヅと呼ぶ一艘の南蠻船、貨物を滿載し新西班牙ヌエバ・エスピナへ向け比律賓島を出帆せしが、洋上大暴風に遭ひ、檣碎け帆破れ舵折れ、流れくたて土佐浦戸港へ漂着せり。小山の如き而も遭難せるが現はれたれば、こゝ南海の小港の平和はいたく攪されたり。手負の鯨の打寄せたるかの如く、磯は人も埋まり、噂は遠近にひろがり、間もなく藩侯よりの目付役は飛びぬ。船長及通詞はこれと海岸にて應答せ

り。要談終りて後船長はポケットより一葉の地圖を取出して、奥南蠻と云はるゝ其本國の強大なることを「土佐王」の一外交官に誇らんがためか、一々服從諸國を指點せり。目付役は西班牙領の廣大なるに喫驚し如何なる計略を以て此等諸國を征服せしかを問ふ。船長はさりげなく語りぬ。されど實に此の答こそ後數代の爲政者の心を捉へて離さざりし恐しき謀なりき。

「吾王は先づ數多の宣教師を諸國に派し異端外道を聖教に歸依せしめ、其數増して後兵を出し奉教者と協力して其國主を討ち亡し土地を奪はるゝ。」

此語は逐一伏見に報せられ、教禁愈々嚴しくなりぬ。實に當時の東洋に於ける西班牙の勢力は素晴しきものなりき。到る處戰へば勝ち、利益を獨占し或は城砦を築き、港灣を掠奪し、既に魔手は比律賓、馬刺加、東印度、新西班牙を覆へども、尙足れりとせず、益々「Greedy Pan」の本領を發揮せんとす。

徳川家康は西人がその財を以て巧に邦人を籠絡し、禍心を懷けるを察して、慶長十六年切支丹嚴禁の令を出し、宣教師、同補を殘らず海外へ放逐し、邦人の改宗せざるものにはこれを倭詰刑に處せり。即ち此等の者を倭に詰め首のみ露はし五ヶ所を束ね、此の人の倭を十石、二十石と積み上げ、改宗する迄食物を與へざる刑にして、倭より首を出したる様、蓑蟲に似たればとて一に蓑蟲の刑とも云ひき、かゝる刑罰を設けて嚴重に取締りしかど尙十人二十人と探し出され果は火刑水刑磔刑に處せらるゝ者絶わす。

西國九州殊に肥前に於ては處刑せらるゝ者多く、島原有馬の地に至りては此嚴酷なる刑罰も改宗せしむべく殆んど何等の効をもなさざりし。

(二) 有馬氏

西九州の發達せる海岸線は數多の半島を構成す。其内海に蟠れる島原半島には、嘗て大友、大村と共に遠く使節を羅馬に派遣せし熱烈なる信者有馬晴信、原城に住す、藩士農工に到る迄深く切支丹を尊奉し、神社佛閣を變じて教會堂となし、學林コレジョを有馬に興して士民に羅典語を教授せしめたり（後に口之津西方加）ギヤマンの器、遠眼鏡、天主堂のオルゴールの音、日曜ドミカ様——

當時有馬の城下は一種異様の匂の漂へる街なりき。家康は之を知り晴信を甲斐に幽し子直純をして嗣がしむ。彼は切支丹を奉せず、嚴に教徒を検し宣教師を逐ひこれが撲滅に努めしかど、名にし負ふ切支丹中心地と見做されし地、一度奥深く喰入りたる教義いかでか一朝一夕に拔けんや、直純は此を如何ともなす能はざりき。家康は再び彼を日向延岡に移せり。然れども直純の家臣等——切支丹を奉ずる殆んど凡ての——は此宗教上利便なる地を離れて山岳圍繞せる新封に移るを欲せず。切支丹のためには累代君家の恩をも顧みず有馬へ止まり多くは農となりぬ。

(三) 悲劇「義踊り」——比律賓遠征計畫

元和三年六月松倉豊後守重政、大和郡山より此處に轉封を命ぜらる。重政は切支丹を忌む事甚しく、人心を新にするの必要を認め、堅城を以て誇りし有馬氏の原城の石垣を悉く取崩し、その巨石を船にて運び北方、島原の森岳に築く。彼は嘗て大阪築城に與りし人、此森岳城は規模こそ小なれ、子孫の爲め晩年の心血を濺ぎ

て成りしものなり。

寛永二年、彼は領内宗門の穿鑿を始め七人の教徒を獲て、之を温泉岳の硫黄の沸騰せる地獄に沈めぬ。又彼は有馬氏の舊臣の資財を沒收して之を自家の臣下に頒ち與へしかば彼等は困窮し馴れざる業に漸く妻子の飢を凌ぐのみ、餘りに苛酷なる暴君の所業を密に恨めども、相手は地頭、彼等は只壘々たる喪家の狗、如何ともせん術なかりき。

重政は又領内を私檢地して十二萬石となし此等疲弊の極に達したる俄百姓並に一般の農夫に苛税を課し納め得ざる者を悉く捕へ、兩手を背後に縛り上げ、兩脚を束ね、褌を着け一列に並べて褌に點火す。

「あら熱や！熱や！苦しや」

地上を踊るが如くに跳ねまわり、轉びまわり、七顛八倒の苦をうけ其身を強く地に抛ちて悶死す。

何たる悲劇！何たる慘劇ぞ！是を襲踊とは云ふ也。かばかりの慘酷なる虐政に苦しみつゝも教徒は如何さもなす能はず。たゞ此剛勇武斷なる重政の死後を待つより外はなかりき。而も壓迫は年一年と加はり行く。

寛永七年彼は比律賓島が西教師の策源地たるを聞き先づ彼等の巢窟を掃蕩せざるべからずとなし、江戸へ建言し、敢て他藩の兵を假らず。唯松倉一家の兵を率ゐる南洋に航して呂宋を征するの允許を與へられんことを乞ふ。幕府遂に之を許し、かば重政は喜び着々準備を整へ、先づ同地内情視察のために、長崎築町の惣太郎權右衛門の兩名を船頭となし、家中吉岡九右衛門、天野與右衛門を遣せり。情報未だ達せざるに、同年十一月重政病死して圖南の壯舉空しく茲に頓挫せり。

重政の子重次は父の政治宗教上の方針を襲用せり。諸税は益々重く、宗門改は愈々嚴也。教徒等は耶蘇像を

壁に塗込み、天井裏に安置し、或はサンタ、マリヤの像を子安観音なりとて人目を繕ひ、拜禮せしも、鋭き役人の眼は、はや之をも悟り氣に見ゆ。此頃より爐税、窓税、棚税を徴せられ、遂に埋葬するに穴錢、出產毎に頭税をも課せらるゝに至りぬ。領内の農民共、永らへて此虐政に苦まんより寧ろ一思に死をこそと語り合へり。

(四) 談合島 — 末鑑 — 天草四郎

不知火燃ゆる有明海中の、周圍一里餘の小島あり。これを湯島、一に談合島と名づく。寛永十四年十月中旬此孤島へ五人の浪士落合へり。關ヶ原役後浪々の身となりし小西が遺臣、大矢野松右衛門、千束善左衛門、大江源右衛門、森宗意軒、片山善右衛門の五名にして、西軍敗亡後、何時かは江戸へ楯突かんと謀り密に天草諸村に布教し機を待ち居りしが、松倉の暴政に島原領の切支丹不穩の兆ありと見て、半島の深江に渡り此地の教徒を煽動せしが愈々事をあげんとて此島へ上陸せしなり。此處にて諸事を談合し、打連れて天草に渡り教徒等を集めて曰く、

「慶長十六年に上津浦會堂のママコスと申す伴天連南蠻へ放たれ候時に、これなる末鑑と申す未來記一卷御殘しなされたり。夫を只今讀上申す故、各位篤と拜聽致さるべし。

「今より五々の年曆に及んで日域に善童一人出生し習はざるに諸道を悟り、應驗天を現はし、東西に赤雲棚曳き、枯木に花咲かば、諸人の頭にケルスを立て江海山野に白旗打なびけ万民 DEUS を尊むの時至るべし」云々

連日の奇しき燒空、時ならぬ櫻の狂咲きに驚き居たりし教徒共は、さては宗門の繁昌とさゝやき合ふ。

「慶長十七年より當年迄數ふれば正しく三十五年。まことに聖教は有難や、微塵も偽り候はず御覽せよ！此頃の西焼を、大江が庭の山櫻を、甚兵衛殿が男子四郎殿は當年正に十六歳習はすして諸術に通じ東西人ならぶなし。此人こそ伴天連の末來記の善童也。の御惠今ぞ來る、切支丹に信心の人々は當座に連判あつて天のため一命を落されよ。」

同月二十四日領主重次の江戸參勤の留守中なれば折やよしと深江村の教徒共、七百餘名蜂起す。

天草にては唐津寺澤の代官の壓制に苦しみし際なれば島原の教徒起つと聞くや直に蜂起せり。

島原天草の頭領共、人遠地離の談合島に集合しては評定をめぐらし、四郎時貞を推して全軍の大將となす。

松倉城代は隣國、細川鍋島兩藩へ援兵を乞ふ。

兩藩は直に援兵を送らんとて先づ豊後目付に此由を伺ひしかど豊後目付は臨機の處置に出づるを知らず只管に江戸の下知をのみ待ちしかば兩藩兵は空しく川尻及刈田に屯したりき。其間に暴徒の數は増して八千に達せり。

(五) さきがけ

幕府乃ち板倉重昌、石谷貞清を上使として西下せしむ。幕議は「兩島の土民等の此舉に出でしは單に松倉、寺澤の暴政に苦しみ事を西教に歸す。」といふに決せり。然れども重昌、貞清共に小身、到底九州諸侯を馭するの器に非ず。亂も亦單なる百姓一揆に非ず。幕府の處置既に誤れり。心ある者は重昌が過重の任を帯びて西下するを惜みぬ。兩上使向ひ、領主歸國すと聞くや、賊は有馬氏の原城址を修覆し、口之津港の倉庫を襲ひ糧米五千餘名を奪ひ、島原の教徒老幼男女悉く城中に入らしめ、天草の教徒も海を渡つて加はり總勢三萬六

千餘となる。

幕府は事態容易ならずとなし鍋島、黒田、細川、有馬、立花の諸氏に出陣を命ぜり。城内防備嚴にして、寄手の死傷日に多し。されば重昌は兵を損せずして効を收めんとせしが、遷延日を曠しうするを恐れ十二月二十日總攻撃をなせしかど、味方の進退意の如くならずして遂に敗る。廿八日重昌は幕府が更に上使として松平信綱を遣せし由を聞き大に憤激し、諸將を招き、余の急攻をとらざりしは徒に將士の損亡せんことを恐れたればなり。近々信綱等馳せ下り他勢を以て此城を攻め落さば、我等何の面目ありてか大樹に見ゆ。元日は敵と雖も油斷あるべし。一舉に之を陥れむ」と。

元日刻限之事

- 一、七ツ時分より人数出、石火矢を打次第、鐵砲打たせ時の聲を上、乗可レ申事
- 一、人数出之時、陣中さわがしく無之様に可ニ申附二事
- 一、大將の外歩立たるべき事
- 一、相印すみ取紙右之肩に可レ附事
- 一、合言葉さいかさいと答可レ申事
- 一、跡レ從鐵砲打せ申間敷事
- 一、小屋之火をしめし小屋番堅可ニ申附二事

極月晦日

石谷十藏
板倉内膳正

此時重昌既に死を決し辭世一首を豫め同役石谷に贈れり。

去年の今日は烏帽子の緒なしめ、今年の今日は甲の緒なしむる、誠に移り替れる世の習早々打立候

あら玉の年の初に咲く花は

世に名を残すさきかけと知れ

城内既に元日に総攻撃のあるべきを知り平素に倍し守備を嚴にし幕兵の來攻を待ち居たり。

寛永十五年一月元日の未明、先づ有馬忠頼の家兵攻め寄せれば賊も亦勇を鼓し、鐵砲長刀石飛礮を打て防ぎしかば卯の刻に敗走し鍋島の兵も敗れたり。

立花兵のみは大手門前の海濱に屯して時々喊聲をあぐるのみにて戦はん氣色も見えず。

前年十二月二十日の一番攻の際、立花勢非常の苦境に陥りしを松倉鍋島勢傍觀したりしに起因する報復ならむ乎。人和せずして攻撃軍の形勢益々非なり。重昌武勇餘りありと雖も悲哉小身、其威九州諸侯を壓するに足らず。外、武門の恥辱をうくるさへあるに、内、今又此内訌、——あはれ今日の勝報を齎して曩の曠日彌久の恥を將軍の前に雪がんとせし其の望も今は仇——噫!!我が事止んぬ!!

重昌は獨り手兵を提げて壕を踰り壁を攀ち壘下に肉薄す。

城内に數間前に吊したる針をも打落すとて名を下針金作と呼ばるゝ射手あり。一隊の兵の先頭に立ちて押寄する武士の、扮装衆に異なるを望見し、彼こそ、一手の大將ならめとて狙ひ打ちたれば重昌遂に仆れたり。諸軍之を聞き、意氣忽ち沮喪して退きぬ。

期待多かりし年頭の總攻撃遂に賊をして名をなさしめしのみ。

(六) 松平信綱——紅毛船^{オランダ}——矢文

信綱等正月四日に着陣し到底一氣に陥るゝことの不可能なるを悟りまた曠日袖手以て城内糧食の欠乏の曉を待つの外なしとて遠卷にし且つ海上より鐵砲を發射せしめしかど舟小にして城高く功果を收むること能はざれば、平戸より紅毛船三艘を回航せしめて沖より大石火矢を放たしめ、且つ黒田、細川兩藩の五十餘の番船よりも盛に石火矢鐵砲を放ちしかば城兵避易して穴倉を掘りて住す。

信綱、勸降の書を認め矢の根に結び付けて之を城内に射込みしむ。城中の返文には降服等は思もよらぬ旨を述べ且つ國內の争に外國の力を藉るは國辱此上なしとて大に罵る。諸侯中また外力を藉るの不可を痛論せしものあり。旁々紅毛船は許されて長崎に向へり。

城よりの矢文

(上略)海上に唐船見來り候誠に以て小事の儀に御座候處漢土迄相催され候事城中の下々故に日本の外聞然るべからず候自國他國の取沙汰是非に及ばず候此れ等の趣御陣中披露に預る可く候誠恐誠惶謹言

寛永十五年正月十三日

城 内

御上使象御中惣御陣中申上

(七) 城内の祈禱——嘲笑

籠城以來、四郎は城内を巡視しては諸兵を勵ませしが、遠卷にして、寄せ來る様も見えざれば、連夜本丸に老幼男女を集めて説教し、祈誓を行ふ。

「父聖と聖子と聖靈の御名に由つて亞孟、天主の尊前に出でて恭しく拜禮せん、

三のベルソリナにて在ます最も尊き唯一の天主！」

月光を浴びて立つ四郎の朗らかなる聲につける數萬の聲は山彦の如く城内に湧き包圍軍の耳を掠めて北條岳の谷に又響く。二月十日、城内度々太鼓をたゞき、踊り舞ふ聲城外に洩れ諸軍を驚かせり。太鼓に合せ唄を歌ひて以て、諸軍を嘲るなり。

「かかれ／＼寄衆もつゝてか、れ鐵砲玉の有ん限は」

「有かたの利生や伴天連様の御影で寄衆の頭をズンと切支丹」

姿を現はしては一齊に Deus! Deus! と連呼して鬨聲をあげて退く。

其翌日、信綱は地を穿ちて城中に達せんとし工夫をして坑を作らしむ。然るに城中よりも糧食缺乏せるが故に間道を掘りつゝありしが寄手の穴に掘り當て、地中に於て合戦始まりぬ。此時賊三名殺さる。

其日の暮城中三丸に火焰立ち騰るを諸軍望み見て以て城内失火ならんとせしかど然らず。はからずも坑道通じ寄手の兵に知られたるを以て坑口に生葉を積んで坑道を燻せる焰なりき。

(八) 落城

一日、四郎時貞、本丸に於て碁を圍む。

折から鍋島の井樓より放ちたる石火矢、四郎の左袖を穿ち侍座の男女數名を仆しぬ。

城中の者共思へらく、天使と雖も猶鐵砲の厄を免るゝこと能はず、且つ侍座の者殺さる。これ不吉の兆な折

りとして意氣大に沮喪しまた前日の元氣なく、飢餓と疲勞とに困じ果て只最後の思ひ出に此古城を枕に討死し打連れての Deus 御許へ赴かんことを冀へり。

信綱乃ち城中既に糧食缺乏せり將に一舉に攻落すべしとして二月二十七日總攻撃を行ふ。

教徒等三ヶ月の籠城に疲れ果て白晝のことなれば、よもや寄することもあるまじと心弛みたるころへ、鍋島の目付榊原職直父子の一番乗りに續く諸藩の兵大手搦手より乗込みければ、賊共不意に驚きつゝ、防戦努めしかど、大勢既に決す。濱手に回らし細川勢のために城内數千の民屋に火をかけられ最早防戦の力も盡きはてゝ本丸さして引上げぬ。

さかしまに降る炎の雨、横様にしぶく血潮の風、矢叫の聲、打物の音、諸軍は煙の中に翻る十字の旗目かけて突進せり。賊魁四郎時貞は細川の家臣佐野佐左衛門のために討たれぬ、賊は彈丸に死するあり、炎に包まれるゝあり、或は怒濤に踊り込むもあり。

寛永十五年二月二十八日未刻に原城は陷落したり。三月一日、信綱は諸將に命じて城を毀たしめ、教徒の首を城外の田野に梟し、四郎の首はその後長崎に於て梟せられぬ。尙又殘類の潜伏を慮り遍く温泉岳の山谷を搜索せしめしかどまた一賊の影もなかりきといふ。

(九) 鎖國

此亂によつて幕府益々切支丹宗の禁制を嚴にし、南蠻人の渡來を禁じ、紅毛人のみ長崎にて通商を許しゝが寛永十六年に至り紅毛人の離種兒捕へられて悉く咬啗吧ヂヤガメラ(瓜哇)に追放さる。此等の者故國戀しさの情に堪へ

ず船便に托して長崎の知己朋友へおこせし文こそ彼有名なる「ジャガタラ文」なり。而して邦人には寺請證文を以て教徒の轉宗を證せしめ、更にその眞偽を試みんがために踏繪をなさしむ。幕府尙是を以て足れりとせず、懸賞法を以て、教徒を告發せしむ。

定

一 伴天連之訴人、銀三百枚

一 イルマン之訴人、銀二百枚

一 同宿並宗門之訴人、銀五十枚、亦者三十枚

萬治元年八月

於是切支丹宗漸く衰頽せり。

(十) 原城の廢墟

要するに此亂起るに至る原因三あり。一に宗教上の壓迫なり。二に政治上の壓制なり。三に浪人の窘窮これなり。天主を奉ずる教徒等は國禁により熱烈なる信仰を妨げられたりしも、島原に於ける教徒探索は他よりも嚴にして引致、慘刑に處せらるゝ者絶えず。加之、前代未聞の松倉氏の暴政に教徒等不穩の狀を呈するを觀破し好機乘すべしとよろこびしは彼等小西の遺臣なりき。

衣食に窮せる五人は自己の慾望を充さんがため巧に天主教を利用し、一少年天草四郎を擁して、教徒を煽動して舉兵し、主君と共に日向に移らざりし有馬氏の舊臣と共に城兵を指揮し九州諸侯十二萬の大軍を引受け

て籠城三ヶ月に及び、剛邁なる三代將軍の膽を寒からしめ、延いては三百年鎖國の夢を貪るべく餘儀なくせしめたるほどの大亂を惹起せしなり。

余昨夏小暇を得て原城の廢墟を訪ひぬ。慶長の昔の羅典語學校の趾は今知るによしなけれども、白雲を阻む温泉岳の姿、急潮高鳴する早崎海峽の眺は昔ながらなるべし。眼下に白馬の跳る絶壁の上に立ちて東方を望めば壘々として浮ぶは天草の群島なり。長鯨潮を吹いて走るが如く海中に横はるは談合島なり。漫々たる海悠々と北風をうけて走る白帆を眺むれば思は、南島に飛んで松倉重政の雄圖を偲ぶ。

踵を回らせば壘壁形を崩して一面の畑なり。殉教徒の埋れし黒き土の上に、青々と茂れるは何の草ども。温泉嵐に城頭高く十字の叛旗翻せし跡何處！月明の夜、遠く淡く包圍軍の焚く篝火を他所に見て、巨人の蹲れる如き古城の奥に心ゆくばかり天に祈りし一少年の殘骸今何處！

彼四郎や僅に十六歳の一幼童、いづくぞ十萬の大軍を引受けて無援の孤城に據り天下を騒がすの膽あらむや。早熟の天才は五浪士に利用せられて遂に賊魁となる。されど海上紅毛船回航して幕軍に應援するを見て矢文を放ちて智恵伊豆と呼べるゝ信綱を罵倒して國辱なりと極言し自國他國の區別を辨まへよと教へしはまた痛快にあらずや。

巍然として聳ゆる板倉重昌の碑を仰げば、事の真相を知らざる柳營の評定の犠牲となりて遂に南國の露と消えし一武將の姿浮ぶ。

從五品内膳正板倉重昌碑

整字林蘊直氏甫撰志士仁人無求生以害仁。有殺身以成仁也。夫生死者天也。命也。偷生全身者。君子所

恥。見危致命者。君子所取也。是以欲立義行遺。毋論難易。欲立身善名。雖顧利害也。從五品内膳正板倉重昌者。武林翹楚也。大考從

四品拾遺伊賀權守勝重。大兄從四品羽林周防權守重宗。父子相繼任京兆尹。保護。(以下欠字)
禁廷。美譽芳聲載在口碑也。重昌身幼奉仕(以下欠字)

東照大神君祝國事。其性剛疆直廉。溫惠潤達。歷仕(以下欠字)

鑒德公(以下欠字)

大猷公。恩眷不翅。寬永十四年丁丑肥前國高來賊民。蠱惑耶蘇據有馬村原古城。蜂起蟻同。事達江府(以下欠字)

大猷公悉使西州侯伯士林誅伐之。殊死重昌置其師監其事。重昌携令嗣重矩即時進發。入其地巡視部嶺邑土。屢出奇計。明年正月元日。重昌突馳奮戰。勇氣趯々。胄碎戈折遂死之。年五十一。惜哉痛哉。重矩追跡進擊。竭力勞心。嗚呼勝敗命也。翟義死于賊軍。表榮死于石頭。忠憤義氣。千古不磨。亦是同日之談也。不幾賊兵族滅。所謂雷霆之誅。由我而速。巢穴之因由我而覆者乎可謂舍生取義者也。誰爲斯人不反袂拭涕乎。及(以下欠字)

嚴有公治世之_時。重矩膺榮選。鎮守難波城。其後頗被登庸。例執政叙從四品任拾遺。爲野州島山城主。食祿五萬石。高大門楣。其子從四品重道。繼封濟美。今大君幕下聽政之初。預國務增食邑。移封武州岩築城。世々積善之餘慶。於是可見焉。重道爲重昌建碑於其戰死之所。欲記其美而傳之千不朽也。追遠之志。述事之孝。以可嘉并焉。謂之平准西碑乎。謂之硯山墮淚之碑乎。請嗣于余。乃叙要概。且係之以銘。銘曰

板倉之姓。源流分清。奕世繼美。榮勳垂名。靈々耶蘇。蚩々賊民。有馬據險。同群聚兵。海日輝甲。風雲飄旌。泰山名重。鴻毛死輕。天降霜雪。松柏持貞。人處夷險。節操存誠。一朝趨義。千歲餘情。孝孫繩武。猶貽後榮。志士感信。以望家。斯人雖沒。宛爾如生。

延寶九年辛酉九月

濤聲松歌徒に高き原城頭、大鬼小鬼今尙相叫び相哭するを聞け。

餘言

一、安土の天主堂。天正年間、信長が其居城安土の町に建てし天主教寺院を大蔵寺と稱せりと言ふ。

二、南蠻寺の半鐘。今、京都妙心寺の塔頭春光院に藏せりと。高さ約二尺余、口徑約一尺五寸、口の厚さ約一寸八分にして重さ十八貫目余、其中に舌環あり、以て舌を懸くべし。外面の中腹には三二五(天正五)なる曆數及ひセス井ト派の徽號を鐫出せりと。蓋し宣教師の舶載せるものなるべし

三、參考史籍

山田右衛門作次言語記十六卷

島原一揆松倉記(享保九年)

吉利支丹物語(寛永十六年)

平戸和蘭商館主 Koeckedacker 書翰

契利斯督記。肥前國有馬古老物語

日本西教史。磯田氏島原亂

(大正四、八起稿大正五、二改稿)